



研究用試薬

## ヒストファイイン

第一抗体

CD138モノクローナル抗体(B-A38) (ヒストステイナー用)

(動物種：マウス)

包装： 60テスト(12mL)

Code：713881

製造販売元

株式会社ニチレイバイオサイエンス

〒104-8402

東京都中央区築地6-19-20

TEL.03(3248)2208 FAX.03(3248)2243

■本品は、自動染色装置ヒストステイナー用の試薬 第一抗体である。

■特異性および抗原分布：CD138(syndecan-1)抗原と特異的に反応する。CD138抗原は、膜抗原であり、細胞外領域に5つのglycosaminoglycan(GAG)の結合部位をもち、膜近傍にはプロテアーゼによって切断される部位が存在する。切断によって生じる細胞外領域ドメインの分子量は発現している細胞によって違いがある(前駆B細胞では非還元状態にて92kDa、形質細胞では85kDa等)。CD138分子は、フィブロネクチン、コラーゲン(I、III、V型)、テナスチン、トロンプスポンジン、アンチトロピンIII、トロピン、リポタンパクリパーゼ等の細胞外基質タンパクのレセプターとして機能し、線維芽細胞増殖因子(basic FGF:FGF-2)、単純ヘルペスウイルスに対するレセプターとしても機能する。血液系細胞においては前駆B細胞と形質細胞に発現がみられるが、その他の血液系細胞(造血幹細胞、成熟B細胞、T細胞、NK細胞、単球/マクロファージ、顆粒球、赤血球、血小板)にはみられないことから、形質細胞の良好なマーカーとして有用である。正常組織では、単層および重層上皮細胞、線維芽細胞、内皮細胞に発現がみられる。腫瘍では、血液系腫瘍である多発性骨髄腫などの形質細胞由来の形質細胞腫、形質細胞の分化に関連する悪性リンパ腫、一部の頭部、頸部の扁平上皮癌に発現がみられるが、急性Bリンパ性白血病(B-ALL)、慢性Bリンパ性白血病(B-CLL)ではみられない。

■クローン名：B-A38

■抗体のサブクラス：IgG1

■免疫原：U266 cell line

■製法：ハイブリドーマの培養上清より得ている。

## 1. 内容

第一抗体・・・CD138モノクローナル抗体(B-A38)(動物種：マウス)。

液状。

ウシ血清アルブミン(BSA)と、0.1%アジ化ナトリウムを含むリン酸緩衝生理食塩水(PBS)中にて、即時使用可能な抗体濃度に希釈済み。

1バイアル中に12mLを含む。

## 2. 使用目的

組織・細胞中のCD138の染色。

## 3. 切片の準備

前処理(抗原賦活化)としてヒストファイイン 抗原賦活化液 pH9(Code:415201 または Code:415211)にてオートクレーブ処理が必要である(裏面参照)。

■参考：組織の固定状況等によりヒストファイイン 抗原賦活化液 pH9(Code:415201 または Code:415211)の代わりに10mMクエン酸緩衝液(pH6.0)を用いたオートクレーブ処理をすることで、より良好な染色結果が得られる場合がある(裏面の■参考参照)。

## 4. 使用方法

パラフィン包埋切片の免疫組織化学および免疫細胞化学染色に使用できる第一抗体である。

1) 他の試薬とともに試薬ラック(ヒストステイナー用)にセットし、染色を開始する。

2) 染色終了後、すみやかに2-8℃に保存する。

## 5. 染色方法の設定

反応時間を30分間とする。

## 6. 貯法

2-8℃保存。

## 7. 使用上又は取扱上の注意

ヒト由来の検体は、取扱者に感染をひき起こす危険性がある。従って、適切な取扱および廃棄法を用いるとともに、この免疫組織(細胞)化学染色法を施行するに際し、関連技術および操作法に充分習熟しておかなければならない。

試薬バーコードラベルを使用する場合は、自動染色装置ヒストステイナーのプログラムにバーコードラベル情報を入力する必要がある。本製品が未登録の場合は、下記データを入力(漢字のみ全角、他半角入力)し、登録すること。

専用ボトルに貼付されているバーコードラベル内の情報

試薬名	CD138モノクローナル抗体(B-A38)
試薬略称(10文字)	CD138-MM
バーコード	CD138-MM
時間(分)	30

## 8. 参考文献

- (1) C. Clement., et al: Leucocyte Typing V B30.7,1993
- (2) J. Wijdenes., et al: Leucocyte Typing VI BC 29,1996
- (3) W. C. Vooijs., et al: Cancer Immunother 42:319-328,1966
- (4) A. Carbone , et al: Blood 91:747-755,1998
- (5) A. Sebestyen, et al: British Journal of Haemtology 104:412-419,1999
- (6) A. Anttonen, et al: British Journal of Cancer 79:558-564,1999
- (7) Ilene B. Bayer-Garner, et al: Modern Pathology 14: 1052-1058,2001
- (8) J. Wijdenes, et al: J Biol Regul Homeost Agents 16: 152-155,2002
- (9) Fionnuala P. O'Connell, et al: Am J Clin Pathol 121:254-263,2004
- (10) L. Colomo, et al: Am J Surg Pathol 28:736-747,2004

■ 研究用としてのみ使用すること。

### ■ 切片の準備

1. 50℃で十分に湯伸ばしした切片(3-4μm厚)をシランなどのコーティングスライド上に張り付け、37℃の恒温器内で16時間以上乾燥させる。
2. 脱パラフィン → 親水化 → PBS
3. 前処理(抗原賦活化): オートクレーブ処理
  - ①緩衝液(下記記載)を耐熱性バットに入れ、切片を浸す。
  - ②バットに蓋をする。蓋が取れないように輪ゴムでとめる。
  - ③120℃、20分間オートクレーブ処理する。
  - ④圧力が十分下がった後、バットごと切片を取り出す。
  - ⑤バットの蓋をはずし、バットごと切片を常温に20分間以上放置し、ゆっくり熱を冷ます。  
※オートクレーブ処理後は、バットおよび緩衝液等が高温になっている。これらを取り扱う際は、手袋等を使用し火傷に注意する。
  - ⑥スライドを緩衝液から取り出し、PBSまたはバッファーでよくすすぐ(3分間ずつ容器を2度かえるか、または洗浄ピンを使用する)。

#### ・抗原賦活化液pH9の作り方

- ・ Code : 415201 抗原賦活化液pH9 (調製済)は、そのまま用いる。
- ・ Code : 415211 抗原賦活化液pH9 (10倍濃縮)は、精製水で10倍希釈する。

■ 参考 : 10mMクエン酸緩衝液(pH6.0)オートクレーブ処理を用いる場合(おもて面の■参考参照)

・ 10mM クエン酸緩衝液 (pH6.0) の作り方

A液9mL+B液41mL+精製水450mL (用時調製)

- A液 : 0.1M クエン酸水溶液 : 常温で保存可能  
クエン酸一水和物 (C<sub>6</sub>H<sub>8</sub>O<sub>7</sub> · H<sub>2</sub>O) 2.1g/精製水 100mL
- B液 : 0.1M クエン酸ナトリウム水溶液 : 常温で保存可能  
クエン酸三ナトリウム二水和物 (C<sub>6</sub>H<sub>5</sub>O<sub>7</sub>Na<sub>3</sub> · 2H<sub>2</sub>O) 14.7g/精製水 500mL

ここから必要な時に調製する。